

夏目漱石とクラシック音楽

(第9回)

ケーベル博士の予想

音楽学者・元東京藝術大学特任教授

瀧井 敬子

今年(2019)2月24日、新国立劇場(OPERA PALACE Tokyo)でオペラを観た。孤高の作家といわれる石川淳の『紫苑物語』を原作にした、同名の新作オペラであった。全4回の公演であった。私は盛況の最終日に行った。

昨年9月に新しく芸術監督になった大野和士はヨーロッパの経験も豊かで、意欲的な企画を次々に打ち出している。オペラ『紫苑物語』は新国立劇場による「日本人作曲家委嘱作品シリーズ」の第一弾であった。委嘱された作曲家は西村朗。

主人公宗頼は自分の人生の意義を見つけ出すことができず、疑心暗鬼にかられ、衝動的な暴力へ走る。舞台の上手、下手、天井に配置された巨大な3つの鏡は、登場人物たちの複雑怪奇な内面を映し出すかのように、衝撃的であった。演出は笈田ヨシ。美術はオランダ出身のトム・シェンク。衣装はアフリカのジンバブエ出身のリチャード・ハドソン。スペクタクルな舞台転換は見事にコンピューター制御されていたが、黒衣も出て来て、手で装置を動かし、小道具を手渡す場面もあった。歌舞伎や文楽でお馴染みの、あの黒装束に黒頭巾である。字幕スーパーは日本語と英語の併記。

21世紀の日本から世界に向けての発信であった。新国立劇場が総力を挙げ、強烈なエネルギーを発していた。帰り道の私は、ケーベルが明治44年(1911)に漱石に語った予想を思い出していた。

明治44年7月10日、夏目漱石はラファエル・フォン・ケーベル博士(1848~1923)を訪問している。このときの訪問記が、朝日新聞の文芸欄に発表された小品「ケーベル先生」である。明治26年に東京帝国大学に哲学教師として招聘された博士の初講義を、漱石は大学院に入った年に聴いていて、以来、敬愛の念を抱いていた。

…文科大学に行つて、此所で一番人格の高い教授は誰だと聞いたら、百人の学生が九十人迄は、数ある日本の教授の名を口にする前に、まづフォン・ケーベルと答へるだらう。…

ケーベルはピアニストでもあった。モスクワ音楽院でニコライ・ルビンシテインやチャイコフスキーに学び、卒業していた。そのこと知った東京音楽学校からの依頼で、彼は明治31年から明治42年まで、ピアノを教え、演奏会にも出演していた。そのことを漱石は知っていた。

明治44年の訪問の折、漱石は日本の洋楽界の現状、そして未来についてケーベルから見解を聞き出した。小品「ケーベル先生」では公にされなかったが、日記には箇条書きでメモを残している。そのなかにはオペラに関することもあった。

今から百年したら日本にオペラが出来るだらうと云ふ話。(明治44年7月10日付の漱石日記)

ケーベルの予想よりもずっと早く日本人はオペラを受容し、今、世界に発信すらしているのだ。